Economic

青森・岩手 トップ語る

# 人とのつながり大切に

## 地域と共に

私の経営哲学・理念

青森クリーン（むつ市）

加藤秀人さん

かとう・ひでと　茨城県つくば市出身。中央大を卒業後、住友金属工業（東京、現日本製鉄）などで勤務。青森クリーンでは2001年から産業廃棄物処分場の設置許可取得などに携わり、16年から現職。

◇企業概要　本社はむつ市奥内二又22。1994年2月設立。産業廃棄物処分業と収集運搬業が柱。産廃と一般廃棄物を受け入れるむつ事業所や運搬の中継基地となる浪岡事業所、営業や渉外業務を担当する青森営業所を構える。正社員数約25人。資本金1050万円。2018年度の産廃処理実績は3万5376㌧。

産業廃棄物処理で青森県内トップの実績を誇る青森クリーン（むつ市）。4月には汚水処理や漏えい防止で最新工法を駆使した新たな管理型最終処分場の操業を始めた。社長の加藤秀人さん(52)に事業内容や今後の展望などを聞いた。

（聞き手・橋端智和）

―4月に稼働した最終処分場の概要は。

埋め立て容積43万1717立方㍍でスタートした。容積が少なくなった場合に備え、32万4059立方㍍分を拡張できるよう青森県に既に許可を得ている。稼働期間は15年間を見込んでいる。

―業績拡大の要因は。

現在、県内におけるシエアは53%ほど。業績拡大は積み替え保管施設として2013年に整備した浪岡事業所の役割が大きい。特に津軽方面のクライアントから喜ばれている。廃棄物を運んでもらえば、その後はわれわれの自社トラックでむつの処分場に運搬する。クライアントはむつの処分場に直接持ち込む必要がなくなり、使い勝手の良さで利用率は毎年伸びている状況だ。

―産業廃棄物処分業界の現状は。

いわゆる3R（リデュース＝減らす、リユース＝再使用、リサイクル＝再資源化）が定着しつつあり、廃棄物の量が減ることは環境行政的に良いこと。最終処分場としては廃棄物の受け入れが減ることになるが、全くなくなるとは思っていないし、今後も最終処分場は必要とされるだろう。

例えば、つい最近まで普通に処理していた廃プラスチックが処理できずに日本にあふれている。中国の環境規制を皮切りに海外の各国で引き受けなくなった。こんなことは5年前ぐらいは誰も予想していないことだ。

―廃プラスチックについての考えは。

リサイクルできないとなれば捨てるしかなくなるが、そのまま最終処分場に持ってきてもらうわけにはいかないので、焼却して減量化するための中間処分場の整備が必要になってくるだろう。

廃プラスチックに対しても、うちとして受け入れる間口を開いておくことが大切になってくる。今後どういう動きが起きるか分からないが、企業として環境行政にどういう寄与ができるかを考えながら経営していかなければならない。

―経営者として大切にしていることは。

人とのつながりだ。地元住民およびクライアントとの交流時間が一番大事だと認識しており、今も地域の力を実感している。今後も社員に人とのつながりを大切にするよう訴えていきたい。

―地域貢献に熱心だ。

地域と共存できるのが一番。地域の理解と信頼があってこそ事業ができる。毎回、小中学校の行事や地域の催しに来賓として招待を受けており、良好な関係が築けていると考えている。

地域に何かを還元するというのは企業理念の一つのテーマ。鹿島アントラーズの主力選手を呼んだサッカー教室や、西武ライオンズの選手を招いた野球教室の開催などはその一環だ。それ以外にも自分たちが使っている市道をメンテナンスしたり、地域の沿道の草刈りもやってる。

―休日の過ごし方は。

時間に余裕があるときは弘前工業高野球部に出向き、投手の指導に当たっている。高校、大学、社会人と野球部に所属し、私も現役時代は投手だった。指導した生徒が活躍してくれるとうれしい。